

体験講義を実施して

田原 広史

樟蔭では、平成十一年度から内部進学対象者（樟蔭高校在生）に対して、体験講義を始めました。ここでは、私が昨年担当した内容について報告します。

平成十二年度の体験講義は、夏休み中の八月下旬におこなわれました。国文学科は、四種類の授業を開講しましたが、私はそのうちの一つを担当しました。私のテーマは、「話しことばの研究について」というものでした。受講した人数は、三年生が十九人、二年生が五人の計二十四人でした。

講義をするにあたって注意したことが二つあります。まず一つ目は、大学ならではの内容をとりあげること、二つ目は、それと矛盾するようですが、初めて聞く高校生にも十分理解できる内容であることです。また、日頃四十五分単位で授業を受けている樟蔭高校生に、その倍の長さの九十分を、休憩なしで受けてもらうわけですから、いかにして飽きず、集中力を持続させることができるかという点にも注意しました。

そのために、九十分をいくつかの部分に分割し、また、一方的に講義を聞いてもらうの

ではなく、生徒自身に考えさせ、考えた結果をプリントの該当欄に記入してもらうような教材を作りました。授業の進め方については、板書はせずに、パソコンを用いて画面に紙芝居のように映しながらおこなう方法と、ビデオを教材として使う方法を併用しました。以下では、講義内容を簡単に報告します。扱った内容は、次の通りです。

- 一、はじめに
- 二、国文学科で学ぶこと
- 三、方言桃太郎（授業の紹介）
- 四、おはよう関西（研究の紹介）
- 五、まとめ

一では、用意した冊子を手渡し、座席表にしたがって着席してもらい、起立礼をした後に、私の自己紹介、生徒の名前の確認をしました。次に、この授業の概要を説明し、導入のために用意した最初の質問、「ことばについて日頃思っていること」について、五分程度でまとめてもらいました。

二では、国文学科のカリキュラムの大まかな仕組みを説明しました。私の授業は、国文学科で一番目の講義だったので、特にこの項目を設けました。具体的には、まず、樟蔭の国文学科の大きな特色である、ゼミ制度について説明しました。二回生になる時にゼミを決め、同じ先生の元で、三・四回生と勉強し

て、卒業論文を執筆するという、早期・一貫教育という点で、他大学に例を見ない良いシステムであることを強調しました。

次に、国文学科の授業や研究分野は、語学と文学の二つに分かれ、さらにそれぞれが、時代によって細かく分かれていることを説明した後、授業形態として、講義・講読・演習の三つがあること、それぞれ、受講する人数や進め方が異なることについても紹介しました。

三では、私がおこなっている授業の中から、音声言語学という授業の教材として使っている、「方言桃太郎データベース」を用いて、簡単な作業をしてもらいました。この自作教材は、昔話の桃太郎の冒頭部分を、日本各地（四十四地点）の方に、方言で語ってもらったものをパソコンに取り込み、日本地図上に表示した印をマウスでクリックすることにより、すぐに音声を聞けるようにしたものです。

まず、沖縄県那覇市の朗読を、文字に表したものと同時に聞いて、本土のことばといかに違ったものであるかを実感してもらいました。次に、青森県五所川原市の朗読について、音声だけを聞いて、それをカタカナで文字にする作業をしてもらいました。その後、この教材が音声学という学問とどのように関連するのかについて説明しました。

四では、私がおこなっている研究の一端を、NHKのニュース番組（五分程度）で放映されたものを使って紹介しました。あらかじめ冊子に番組の流れを示しておき、まず一度通して見てもらい、次にもう一度、解説をしながら見ました。研究の意義を説明するとともに、NHKテレビ番組の作成の裏話などを交えながら、CG（コンピュータグラフィック）を用いた技術力の高さを評価し、逆に報道に対する姿勢の問題点について、私の考えを述べました。

五では、この授業でおこなったことをもう一度おさらいし、まとめを述べました。また、レポートについては、授業中に使った冊子を自宅で完成させてから提出するように伝えました。

以上で報告を終わります。九〇分にしては、内容が盛りだくさん過ぎたようにも思いますが、日頃大学でおこなっている授業の中で注意している点、工夫している技術を、ふんだんに盛り込むことができたと思います。

当日は、理事長で学長の森眞太郎先生、国文学科現主任の谷垣伊太雄先生も出席してくださり、高校生に教えるというだけでなく、同僚に見ていただくという点でも、良い経験をさせていただきました。

（本学助教授）